

クリニック
interview

多焦点眼内レンズが地域の課題を解決

医療法人涼悠会 留守 良太 理事長

【とめもりりょうた】1993 福岡大学医学部卒業 1998 トメモリ眼科・形成外科院長 1999 近畿大学医学部附属病院非常勤講師
2010 医療法人涼悠会理事長

和歌山県の高齢化率の状況は全国8位。近畿府県で見れば最も高く(2018年1月1日現在)、ここ橋本市でも、高齢化に伴うさまざまな課題が表面化している。医療法人涼悠会・留守良太理事長は「眼科医療の発展」という側面から地域を支えるべく奮闘する。

—どのような患者さんが多いのですか。

やはり、多くが高齢の患者さんですね。父の急逝によって私が医院を継ぐことになり、1996年、福岡から故郷の和歌山へ戻りました。その頃、こんなことがあったのです。患者さんは網膜剥離がかなり進行し、一刻も早く手術しなければ失明の危険がある。そんな状況にありました。当院には手術設備がなく、私が非常勤講師を務めている大学病院で手術したいと話しました。

ところが「遠くまで行って手術を受けることはできない。家族に迷惑をかけるわけにはいかない」とお断りされたのです。地域で手術できる環境が必要だ。そう強く実感した私は、手術室を開設。さまざまな眼科疾患の治療に対応できるように、環境を整えていったのです。

—治療の現状について教えてください。

ものを見るとき「レンズ」の役割を果たしている水晶体が濁ることによって十分な光が届かず、見えにくくなる白内障。手術では、濁った水晶体を取り除き、人工の水晶体である眼内レンズを挿入します。

眼内レンズには保険適用

の「単焦点眼内レンズ」と先進医療の「多焦点眼内レンズ」の2種類があります。単焦点眼内レンズは遠く、あるいは近くの「ある1点」はよく見えますが、ピントを調節する機能がありません。見る対象の距離に応じて眼鏡が必要です。多焦点眼内レンズは、ここ10年ほどで導入された「近くと遠くの両方」にピントを合わせることができ、レンズです。どちらかといえば、ターゲットは都会で暮らす人々だったのでないでしょうか。

そんなイメージからすると、果樹園などを営む農家の方がとても多いこの地域は、都会とは対照的な環境です。でも、実は多焦点眼内レンズのニーズに合致する場所でもあったのです。遠くの枝ぶりを見て、次に手元の授粉の状況を見て、視線は遠くと近くを行ったり来たりします。

そのたびに老眼鏡をかけたり外したりを繰り返すのは大変ですし、ビニールハウス内では「眼鏡が曇ってしまうので困っている」という声もよく聞きます。

まさに、多焦点眼内レンズはこうした課題を解決するものと言えます。当院で白内障手術を受ける患者さんの3割ほどが多焦点眼内レンズを選択します。

先進医療として承認されているものですが、少ない負担が必要です。患者さんにはレンズの違い、費用について十分に理解してもらえよう、丁寧な説明を心がけています。

また、術後のスムーズな回復には、きめ細かなトレーニングや指導といったフォローが大切です。手術の前後で、患者さんの目のピント調節の感覚が変わるからです。手術の精度を高めるとともに、患者さんの満足度を重視した取り組みにも力を入れています。

—今後の予定は。

グループのクリニックとして、JR大阪駅に直結のグランフロント大阪北館地下1階で「梅北眼科」を運営しています。来年、橋本市に近い岩出市にも新たなクリニックを開院する予定です。

これまでなかなかトメモリ眼科・形成外科に来ることができなかった地域で暮らす患者さんにも、良質な治療を提供していきます。

近畿大学との共同研究で開発した緑内障のスクリーニング装置も積極的に活用していきたいですね。暗室が不要で、スピーディーな検査が可能です。失明のリスクから1人でも多くの患者さんを守りたいと思っています。



医療法人涼悠会
トメモリ眼科・形成外科
和歌山県橋本市市脇5-4-23
☎0736-32-9358
<http://www.tomemori-ganka.com/>